

認知的観点から見た格助詞ヲ、ニの意味のネットワーク

森山新

morishin@sejong.ac.kr

1. はじめに

最近の認知言語学では、格助詞の意味が一つにまとまらないことや、多くの意味・用法があるといったことは、それらが意味を持たないことと同義ではないと主張し、格助詞は他の語彙同様、意味を持つものであること、そのいくつかの意味はプロトタイプの意味を中心としたネットワーク構造をなすものであることを主張している。もしそれぞれの格助詞になんらかのプロトタイプの意味が存在し、その他の意味はプロトタイプからの拡張として捉えられるとするならば、それぞれの格助詞のプロトタイプ的な意味と拡張された意味とのネットワーク構造を示すことは、人間の認知の構造とも合致し、習得の負担を軽減してくれるに違いあるまい。

本稿ではこうした最近の認知言語学の成果を参考にしながら、教育的な動機から、格助詞ヲとニの意味のネットワークを示すことが目的となっている。

2. 先行研究

ヲには以下のような意味・用法がある。

- ①対象を表す。これには、働きかけの対象、作り出される対象、受け渡しの対象、精神作用の対象などがある。「子供を殴る」、「家を建てる」、「本を貸す」、「母を戀しがる」
- ②離れる場所を表す。「驛を出る」、「故郷を去る」、「大學を卒業する」
- ③運動の行われる空間を表す。通過空間ともいうべきもの。「道を渡る」、「驛を通過する」、「空を飛ぶ」
- ④経過する時間を表す。「思春期を経て大人になる」、「4年間を仙臺で過ごした」
- ⑤自動詞を使役文にしたときの、自動詞の表す動作・作用の主體を表す。「水を凍らせる」、「子供を走らせる」（『日本語教育辞典』、p.392）

ニには以下のようなさまざまな意味・用法があるとされる。

- ①在り場所を表す。「庭に池がある」、「父は東京にいる」
- ②行く先を表す。「大阪に行く」、「山に登る」、「たなに本を載せる」
- ③物の授受などを行う相手を表す。「彼に手紙を送る」、「答えを先生に聞いた」、「彼女に借りる」
- ④動作や態度が向けられる先を表す。「母に甘える」、「犬が通行人にほえる」、「英雄にあこがれる」
- ⑤原因を表す。「戀に悩む」、「がんに死ぬ」
- ⑥變化の先を表す。「水が氷になる」、「彼を課長にする」
- ⑦形容詞の表す状態が成り立つための基準や志向対象などを表す。「山に近い」、「AはBに等しい」、「彼は日本史に明るい」、「彼はお酒にうるさい」
- ⑧動作の目的を表す。「花見に行く」、「日本へ研究にやってきた」
- ⑨時を表す。「7時に起きる」、「秋に結婚する」
- ⑩動詞を受け身文にしたときの、動詞の主體を表す。「子供に死なれる」、「彼に殴られた」
- ⑪動詞を使役文にしたときの、動作の主體を表す。「彼にその仕事をやらせた」、「息子

に行かせた」(『日本語教育辞典』、p.393)

最近の認知言語学では英語や獨語などさまざまな言語を分析しながら、直接目的語を作る對格や間接目的語を作る與格の意味のネットワーク構造が研究されている(Langacker: 1991, Smith: 1985, 1987)。

圖1 他動詞節の動作連鎖 (Langacker(1999: p.360) 圖8.2)

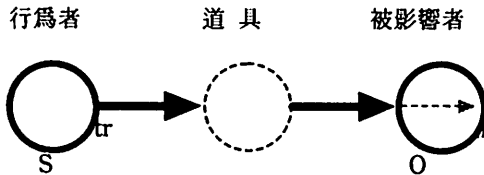
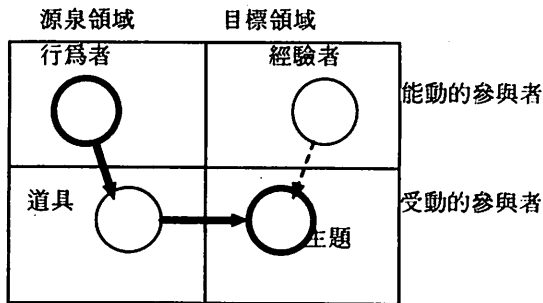


圖2 二重目的構文の動作連鎖 (Langacker(1999: p.353) 圖7.5)



3. 日本語のヲ格とニ格

(1) 彼に手紙を送る。(格助詞ニの③)

對格はプロトタイプとして目標領域における受動的參與者(被影響者、移動者)であり、物理的物體である。つまり對格のプロトタイプはモノである。しかしながらヲの意味・用法を見ると、ヲ格は(1)のようなモノだけでなく、人、さらには場所や時にまで及んでいる。このことは日本語のヲ格が對格の域を越え、ヲの意味・用法②~④(前掲)のように場所や時などの狀況格にまで及んでいることを示している。

與格はプロトタイプとして目標領域における能動的參與者(經驗者)で、始發能力を持っている。ということは、與格はプロトタイプとしては人である。しかしながらニの意味・用法を見ると、(1)のようにニ格が人であるものはニの意味・用法のうち③のほか④、⑩、⑪(前掲)などに限られている。このことは日本語のニ格が人をプロトタイプとしながらも、それだけにとどまらず、モノ、場所、さらには時間までも意味役割の領域に含んでいる。つまりその領域は對格同様、與格的なものから場所や時など、狀況格的なものにまで及んでいる。

従って日本語のヲ格やニ格を新たに次のように定義しなおしてみる。

ヲ格とは源泉領域に屬する主格を起點とした動作連鎖の目標領域に含まれ、動力の流れの終着點(最下流)に位置するものである。動作連鎖は他動詞的なものをプロトタイプとするが、それに加え、動作連鎖の終着點が場所や時の場合をその擴張例として含む(その場合、場所や時は動力を受けて何らかの變化を引き起こすものではなく、逆に反作用を引き起こして主格を移動せしめる動力として作用する)。その結果ヲ格になりうるものは、モノをプロトタイプと

しながらも、それに限らず、人、場所、時なども含むが、それらは主格に対し受動的參與者であり、動力の流れの下流に置かれている。(2)～(5)はモノ、人、場所、時を對格とした文例である。

- (2) 彼はボールを投げた。(モノ)
- (3) 彼は妹をなぐった。(人)
- (4) 女の人が道を歩いている。(場所)
- (5) 思春期を経て大人になる。(時)

一方ニ格は主格を起點とした動作連鎖には含まれず、その意味において目標領域にあっても主格から獨立している。ニ格になりうるものは、プロトタイプとして受領者、聞き手などの経験者であり、これらは知覺、判断、感覺、感情、あるいは一般的な経験動作の起點となり、それらを表す動詞の主格となりうる意志を持った能動的參與者(人)である。しかしながらニ格はそれに限らず、モノ、場所、時などのように、新たな動作連鎖の起點とはなりえないが、主格を起點とした動作連鎖には含まれず、目標領域において獨立して存在しているものを含んでいる。これらは主格に対する受動的參與者でないという意味において非受動的參與者であり、能動的參與者の特殊例(擴張例)として捉えることができる。(6)～(9)は人、モノ、場所、時をニ格とした文例である。

- (6) 彼は弟におかしをあげた。(人)
- (7) 子供が自轉車に乗る。(モノ)
- (8) 先週、私は大阪に小包を送った。(場所)
- (9) 私は8時に朝ご飯を食べる。(時)

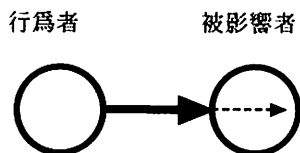
4. 格助詞ヲの意味のネットワーク

プロトタイプとして格助詞ヲは、第一に(他動的動作連鎖の終着點にあることから)他動詞と共起し對格となり、第二に物理的物體(モノ)であり、第三に目標領域に屬する受動的參與者(被影響者、移動者)として何らかの變化を被り、第四に節によりプロファイルされた部分において、主格に次いで第二の圖(ランドマーク)であると特徴づけることができる。このうち第四の特徴づけは、格助詞ヲを大まかにカテゴリー化する共通した特徴づけであると思われるので、残りの3つを條件に、格助詞ヲの意味のネットワークを考えてみたい。

4. 1. ○○○(W)¹⁾

- (10) 本を貸す。①(W)
- (11) 家を建てる。①(W)

圖3 「本を貸す」、「家を建てる」の動作連鎖(W)



1 「○○○」とは格助詞ヲのプロトタイプとしての3つの条件づけをすべて満たしている事例であることを示す。

4. 2. ○×○ (W1) / ○×× (W2)

(12) 子供をなぐる。① (W1)

(13) 母を戀しがる。① (W2)

圖4 「子供をなぐる」の動作連鎖 (W1)

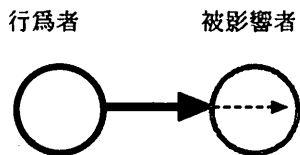
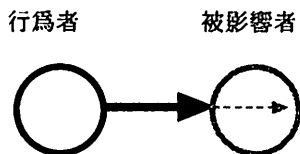


圖5 「母を戀しがる」の動作連鎖 (W2)



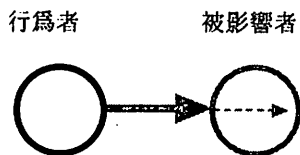
4. 3. ××× (W3)

② 「驛を出る」、「故郷を去る」

③ 「道を渡る」、「驛を通過する」

④ 「思春期を経て大人になる」、「4年間を仙臺で過ごした」

圖6 「驛を出る」、「道を渡る」、「思春期を経て大人になる」などの動作連鎖 (W3)



4. 4. ×○○ (W4) / ××○ (W5)

⑤ 「水を凍らせる」、「子供を走らせる」

圖7 「水を凍らせる」の動作連鎖 (W4)

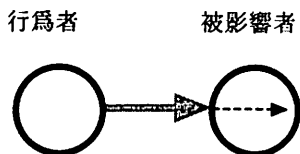
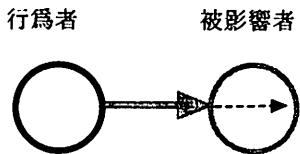


圖8 「子供を走らせる」の動作連鎖 (W5)



4. 5. 格助詞ヲの意味のネットワーク構造

W → W1 → W2 → W3
 ↓ ↓
 W4 → W5

5. 格助詞ニの意味のネットワーク

格助詞ニの意味のプロトタイプは図2または(1)で示された與格であると考えることができる。このニ格は、プロトタイプとして第一に能動的參與者(經驗者)、すなわち人(有情物)であること、第二に主格とニ格との間にモノの移動があること、第三に移動の方向性が主格からニ格であること、の3つの条件で特徴づけることが可能である。

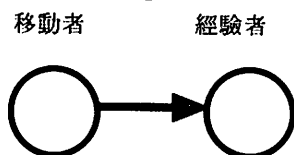
5. 1. ○○○ (N)

自動詞節は他動詞節からの拡張と考えられる。

他動詞節：彼に手紙を送る。③ (N)

自動詞節：友だちに会う。② (N)

図9 「彼に手紙を送る」の動作連鎖 (N)

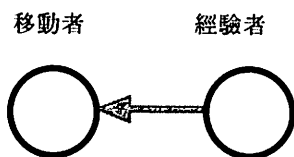


5. 2. ○○× (N110)

他動詞節：彼女に(～を)借りる。③ (N110)

自動詞節：彼女に借金する。(N110)

図10 「彼女に借りる」の動作連鎖 (N110)



5. 3. ○×○ (N101)

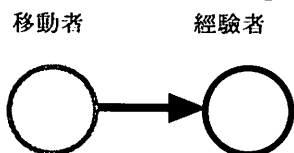
他動詞節：學生たちに日本語を教える。③ (N101)

彼にその仕事をやらせた。⑩ (N101)

自動詞節：母に甘える。犬が通行人に吠える。英雄にあこがれる。④ (N101)

息子に行かせた。⑩ (N101)

図11 「學生たちに日本語を教える」の動作連鎖 (N101)



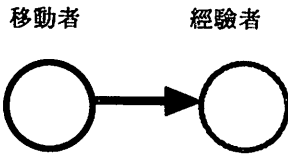
5. 4. ×○○ (N011)

他動詞節：たなに本を載せる。② (N011)

自動詞節：大阪に行く。山に登る。② (N011)

花見に行く。日本へ研究にやってきた。③ (N011)

図12 「たなに本を載せる」の動作連鎖 (N011)



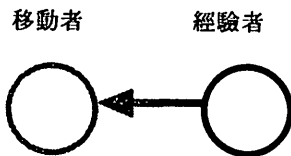
5. 5. ○×× (N100)

他動詞節：答えを先生に聞いた。③ (N100)

自動詞節：母に似ている。(N100)

彼になぐられる。子供に死なれる。⑩ (N100)

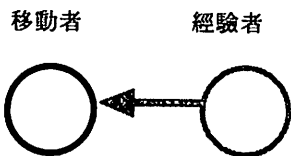
図13 「答えを先生に聞いた」の動作連鎖 (N100)



5. 6. ×○× (N010)

「學校に黒板を借りる」

図14 「學校に黒板を借りる」の動作連鎖 (N010)



5. 7. ××○ (N001) N011/N011からの擴張と思われる。

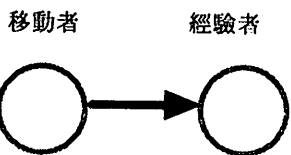
他動詞節：彼を課長にする。⑥ (N001)

自動詞節：水が氷になる。⑥ (N001)

庭に池がある。父は東京にいる。① (N001)

戀に悩む。がんに死ぬ。⑤ (N001)

図15 「彼を課長にする」の動作連鎖 (N001)

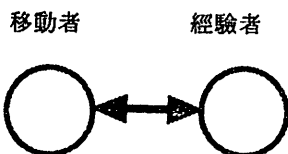


5. 8. ××× (N000)

自動詞節：山に近い。AはBに等しい。⑦ (N000)

彼は日本史に明るい。彼はお酒にうるさい。⑦ (N000)
 7時に起きる。秋に結婚する。⑨ (N000)

図14 「山に近い」などの動作連鎖 (N000)



5. 9. 格助詞ニの意味のネットワーク構造

N → N110

↓

N101 → N100

↓

↓

N011 → N101 → N000

6. まとめ

認知言語学の観点から、日本語の格助詞ヲとニの意味のネットワーク構造がどのようになっているかについて考察した。先行研究において英語や獨語などによって分析された對格や與格のプロトタイプの特徴づけは、日本語におけるヲ格、ニ格のプロトタイプともなり、ヲ格やニ格のさまざまな意味・用法は、そうしたプロトタイプの意味が擴張されて派生したものであると解釋された。したがって格助詞ヲやニが持っているさまざまな意味・用法はそれぞれが相關関係のない獨立したものではなく、また格助詞は單なる形式に過ぎずそれ自體意味を持たない形態素などといったものでもない。格助詞は他の形態素や語句と同じように、一つの核となるプロトタイプの意味が存在し、さまざまな意味はそこからの擴張として派生したものだと言えることができる。

このことは格助詞ヲやニを教える際に何らかの方向性を示してくれると思われる。なぜならば習得は基本的にプロトタイプからその擴張へと進んでいくものであり、言語習得は母語習得であれ第二言語習得であれ、こうした意味のネットワークの構築が伴うと考えられるからである。本研究の成果を言語習得にいかに応用、活用していくかについては、今後さらなる研究が必要であろう（例えば杉村他(1998)では多義動詞の學習において、意味を關連づけるイメージスキーマの提示が意味の背後に存在する構造を氣付かせ、學習の助けになることが示されている）。今後の課題としてぜひとも解決していきたい。

参考文献

- Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2. Stanford University Press. (韓國語(金鐘道)譯(1999).『認知文法の土臺II』ソウル:圖書出版朴而情)
- Smith, M.B. (1985). Event chains, grammatical relations, and the semantics of case in German, *Papers from the Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* 21: 388-407.
- Smith, M. B. (1987). Metaphorical models of thought and speech: A comparison of historical directions and metaphorical mappings in two domains, *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 13: 446-459.
- 杉村和枝・赤堀侃司・楠見孝(1998).「多義動詞のイメージスキーマ」『日本語教育』99: 48-59.

